

〈研究ノート〉

企業理論の確立に向けて ——ゲーテンベルクの回想（2）——

万 仲 脩 一

1. 序

万仲脩一(2002)において、われわれは、ゲーテンベルクがGutenberg(1989)で行っている回想にもとづいて、彼が経営経済学研究を本格的に行うようになった経緯、特に理論的性格の強い経営経済学の確立を志向するに至った理由などを概観した。その場合、それが彼の回想にもとづいていることから当然のことながら彼自身の個人的な事情に注目することになったのみならず、第2次大戦後の1920年代のドイツの経済と企業の混乱した状況、さらにはその当時の国民経済学および経営経済学の状況などとの関連を意識せざるをえなかった。

そうした状況のもとで、当時のゲーテンベルクの到達した経営経済学研究の成果が彼の教授資格獲得論文Gutenberg(1929)であったことについては、異論はないであろう。それは、彼のライフワークとなったGutenberg(1951)(1955)(1969)——いずれも初版——として結実した彼独自の経営経済学ないし企業理論を方法論的に方向づけるものであった。しかし、そのような彼の経営経済学が確立されるに至った理由については、われわれは1920年代のゲーテンベルクの学問的遍歴から、とりわけ彼の経営経済学研究の過程での哲学的ないし科学論的基礎の形成からこれを明らかにしなければならない。幸い、ゲーテンベルクはこの点についても彼の回想の中でさらに詳細に言及している。本稿の目的は、この点について概観することにある。

2. 「かのようにの哲学」とゲーテンベルク

——ゲーテンベルク[著]『仮構としてのチューネンの孤立国』（1922）をめぐって——

万仲脩一(2002)において言及したように、ゲーテンベルクはハレ大学での国民経済学研究の成果として『仮構としてのチューネンの孤立国（Thünen's Isolierter Staat als Fiktion）』と題する論文を書き、これによって1921年に同大学から博士号の学位を取得した。Gutenberg(1922)がそれにほかならない。彼は当時の国民経済学において支配的だった歴史学派に失望し、理論的研究を強く志向していた。そして、ファイヒンガー（Faihinger, H.）の「かのようにの哲学

(Philosophie des Als-Ob)」に大きな関心を寄せていたことから、彼はその理論的研究の拠りどころをこの「かのようにの構成」に求めた。これは孤立化的抽象の方法 (die Methode der isolierenden Abstraktion) と称せられうる方法であり、ゲーテンベルクはこの典型をチューネン (Thünen, J. H. v., 1783~1850) の著書 Thünen(1826) における方法に見出し、上記の学位論文においてその方法論的吟味を行ったわけである¹⁾。

理論的性格を強く有しているといわれるゲーテンベルク経営経済学の形成に関心を寄せているわれわれにとっては、Gutenberg(1922)を通して、彼がThünen(1826)の方法をどのように理解したのかを知ること、および彼の経営経済学が「かのようにの哲学」からどのような方法論的影響を受けているのかを吟味することがここでの特に重要な課題でなければならない。

(1) チューネンの『孤立国』における孤立化的抽象の方法

Thünen(1826)は『農業と国民経済との関連での孤立国』というその書名に端的にあらわれているように、農業に重点を置いており、ゲーテンベルクの取り上げた第1部においては各種の農業方法の相対的有利性の如何に関する研究がその中心課題の1つをなしている。しかし、ゲーテンベルクがチューネンの研究を重視するのは、その具体的内容の故にというよりは、その論理的基礎の特殊性の故にである。かくして、Gutenberg(1922)はチューネンの研究の方法論的特質に関心を向けるのであるが、彼はその考察に入る前に、科学的方法として一般に認められている演繹 (Deduktion)、帰納 (Induktion) と、仮説 (Hypothese) について論じている。そこで、われわれもこれらについてのゲーテンベルクの見解について概観しておこう。

周知のように、帰納法は現実の観察と実験によって個別的なもの (das Einzelne) ないし特殊なもの (das Besondere) からそれらの共通の特徴を導くことにより一般的なもの (das Allgemeine) あるいは恒常的なもの (das Konstante) ないし法則性 (Gesetzlichkeit) を獲得しようとする方法である。しかし、帰納法においてそのようなして獲得された命題が論理的には単に仮説にすぎなく、決して厳密に証明されたものではないことが注意されなければならない。ゲーテンベルクはThünen(1826)においてこの帰納法が用いられている例として、次のものを挙げている。すなわち、チューネンが観察と実験による統計的計算にもとづいて種々の作物の価格 (輸送費) のもとでの土地地代 (die Landrente) の形成について考察し、例えば「作物の価格が低い場合には、いわゆる輪作農業ないし輪栽式農業 (Fruchtwechselwirtschaft) や穀物と飼料

1) チューネンの『孤立国』は最終的には3部から構成されることとなったのであるが、その第1部は1826年に、第2部第1編はチューネンの没した1850年に、同第2編と第3部はさらにその後の1863年にそれぞれ公刊された。したがって、チューネンのこの書物は厳密にはThünen(1826~1863)と記されるべきなのであるが、ゲーテンベルクが取り上げているのは主として第1部であることから、本稿ではThünen(1826)と記すこととする。

チューネンの経歴については、チューネン [著]、近藤康男/熊代幸雄 [訳](1989)、650-659頁を参照のこと。なお、同訳書の660-666頁には、「チューネンの時代とその学説」と題する近藤康男教授による解説も掲載されている。

植物との輪作農業ないし穀草式農業（Koppelwirtschaft）のような集約的農業が既に非収益的になっているときでも、三圃農業（Dreifelderwirtschaft）のような粗放的農業（extensive Wirtschaft）がなお地代を生み出しうる」という法則を導いていることがそれである。グーテンベルクによれば、チューネンはそのでは直接的に現実の観察から出発し、孤立国という特殊な場合の想定のもとではあるが、それを法則化していると解せられるのである²⁾。

これに対し、演繹法は、帰納的に獲得された認識あるいは先験的な認識から出発して、そこから純粹な推論や推測によって個別的なものの説明に到達しようとする方法である。グーテンベルクは、チューネンにおけるこの方法の利用例を次の点に見出している。すなわち、チューネンが労賃（Arbeitslohn）の概念を労働能力の維持のために要する生活手段（Notbedarf）と余剰（Überschuß）に分解し、あるいは資本を自然との協働のもとに人間の労働によって産出されたものとして、したがって労賃の関数として捉え、それらの関係を数学的に把握しようとしていること、がそれである³⁾。さらに、グーテンベルクによれば、チューネンが輸送費（穀物価格）という経済的要因の作用から耕作の強度の相違が必然的に生じることを孤立国の抽象化にもとづいて導出する場合、それもまた演繹法の使用例にほかならない⁴⁾。

このように帰納法と演繹法は対照的な面を有するのではあるが、両者は密接に関連していることが看過されてはならない。現実の個別的現象からの一般的な命題ないし仮説の導出は帰納法によって行われるのであり、演繹法はこの一般的な命題の論理的転換により個別の事象を説明する個別的命題を導き、その仮説の蓋然性のテストを可能にするからである。かくして、帰納法と演繹法は仮説を介して結びつくのである。ここで、仮説とは、暫定的に真であると見なされ、そこから導かれる結果のテストを待っている命題を意味する。帰納法と演繹法は相互に排他的なものではなく、上述のようにチューネンにおいても両者が利用されている。そこで、グーテンベルクはチューネンの全体的な方法の中に、後に多少詳しく論じる仮構によるそれを含めて、3つの要素を区別することとなる。すなわち、

- ① 現実の正確な観察から出発する統計的な研究と計算——傾向的には帰納的、
- ② 孤立化による現実の整理——傾向としては仮構的、
- ③ 特に数学を利用する研究——傾向としては演繹的、

がそれである⁵⁾。

チューネンの方法としてこれらの要素のどれが重視されていると考えるかに従って、チューネン研究者のある者はそれを帰納的であると見え、ある者は演繹的だと見なしてきたのである⁶⁾。

2) Vgl. Gutenberg(1922), S.32.

3) 労賃を A 、生活手段を a 、余剰を y 、資本を Q とすれば、労賃と資本はそれぞれ次のように示される。すなわち、 $A = a + y$ 、 $Q = q(a + y)$ がそれである。Vgl. Gutenberg(1922), S.32.
このことについては、近藤康男/熊代幸雄 [邦訳](1989), 362頁をも参照のこと。

4) Vgl. Gutenberg(1922), S.32.

5) Vgl. Gutenberg(1922), S.34

6) グーテンベルクはチューネンの方法の特質を帰納法に見る者として、エーレンベルヒ (Ehrenberg,

それでは、チューネン自身は Thünen(1826) において使用している方法をどのように考えているのであろうか。彼の研究方法上の特質、すなわち孤立国の抽象化、数学の利用、彼の説明の著しい論理性、あらゆる事象の理由ないし原因を追求しようとする彼の努力の強さから判断する限り、理論家としての彼の顕著な性格は明らかであろう。ゲーテンベルクによれば、チューネンは経済事象を2つの部分、すなわち恒常的 (konstant) な部分と変動的 (variabel) な部分に区別する。前者は経済事象における時間的および空間的に一般妥当なもの、あるいは永遠のもの (das Allgemeingultige ; Ewige) であり、チューネンの究明しようとしているものはまさにそれを貫く法則にほかならない。そして、この研究にとっては観察は必ずしも有効ではありえない。ただし、観察によって獲得されるものは単に「何であるかということ (daß ist)」、つまり現実の事象の確認にすぎないのであって、決して法則、すなわち「そうでなければならない、あるいはそうであろう (daß es so sein muß oder sein wird) ということ」ではないからである⁷⁾。

もとより、チューネンは許容される範囲での抽象化に役立つ限りで、現実の正確な観察を重視することの意味を否定してはいない。だが、観察によっては単に現実を記述しうるにすぎないのであり、彼にとって重要なことは現実の事象を単に知ることではなく、その事象の理由ないし原因を究明すること、つまり事象の本質に深く入り込んで法則を確立することだからである。このことは、帰納法が彼の研究方法の特質をなすわけではないことを示している。

かくして、チューネンの重視するのは孤立化的抽象の方法である。これは、複雑な現実のうちの一部を分離し、したがって意識的に現実から離れた前提を設け、したがってそのもとにある要因の作用をそれ自体として孤立的に認識するという方法である。極端な場合には、それは現実の多数の変数のうちの1つをいわば独立変数と見なし、その変化に伴う特定の従属変数の変化を分析するという方法になる。その場合には、それら以外の要因は不変ないし一定と仮定される。このようにして獲得された認識はその個別的な前提に規定されるのであるから、その一般的妥当性もまた制約されざるをえない。そこで、その認識に一般性を付与するための有効な方法としてチューネンの考えるものこそは形式科学としての数学にほかならない。数学は、個別的な事象について妥当することを論理的な展開により一般化することを可能にするからである。その限りで演繹的方法が利用される。ここで、数学の利用が命題の同義反復的な論理的転換を可能にするものの、命題的内容的な豊富化を実現するものではないことに、われわれは注意しておかなければならない⁸⁾。

これを要するに、ゲーテンベルクによれば、「孤立化的抽象の原理はチューネンのすべての研究の共通の基礎を形成しているものであり、全体の方法にその特別の独自性を付与している。しかし、チューネン自身にとって数学が彼の全体の方法の究極的な頂点をなしてきたことが常に注意

R.) とその門下のパッソウ (Passow, R.) とを挙げている。この点に関するゲーテンベルクの批判については、Gutenberg(1922), SS.40-48 を参照のこと。

7) Vgl. Gutenberg(1922), SS.49-50.

8) 経済的法則の確立に際しての数学の使用に対しては批判的見解もある。この点については、Gutenberg(1922), S.51 を参照のこと。

されるべきである。』⁹⁾ここに、グーテンベルクは、孤立化的抽象の原理こそがチューネンの研究方法の特徴をなし、数学はそのための極めて有効な手法として利用されてきたことを強調しているわけである。この孤立化的抽象の方法は前述の区分でいえば、「孤立化による現実の整理」に該当するであろう。したがって、それはグーテンベルクの意味で仮構的であり、同時に演繹的である。そこにファイヒンガーの「かのようにの哲学」との関連も見出されることとなる。そこで次に、この哲学における仮構についてのグーテンベルクの見解を概観することとしよう。

（2）「かのようにの哲学」における仮構

グーテンベルクはファイヒンガーの「かのようにの哲学」における仮構をいくつかの例によって説明している¹⁰⁾。

ここでは、スミス(Smith, A.)における例を紹介しておこう。スミスによれば、共感(Sympathie)と利益(Interesse)はあらゆる人間行為の原動力である。彼は前者の共感を彼の道徳哲学の基礎として持ちながら、後者の経済的利己主義(wirtschaftlicher Egoismus)ないし個人の利益(Vorteil)の追求を方法論的考慮のもとで国民経済的システムの基礎として位置づける。スミスにおいては、市場経済においては原子的単位としての多数の個別的経済単位の利益が相互に市場で対置させられ、相互に規制しあうことにより、経済全体として最も有利な状態が実現するという自然法(Naturrecht)が作用すると想定されている。かくして、スミスにおいては、自然法と経済的利己主義は市場経済の基本仮定として密接な関係に置かれているのである。

スミスの経済学研究とその成果がこの公理的仮定に基礎を置いていると同時に、それによって制約されていることに、グーテンベルクは特に注意を向ける。スミスによれば、このようにしてはじめて、混沌として絡み合った経済生活の諸関連とその因果関係が解明されうると考えられているからである。この単純化こそが利他主義的な感情、慣習、宗教的観念、怠惰や浪費といった経済行為の雑多な心理的動機にさらされている現実からの抽象化にほかならない。それらの複雑な現実のうちの特定の要素を意識的に度外視し、そのような意味で現実を強制的に限定し、可及的に単純な場合を擬制することによって、つまり仮構を構築することによってかえって、スミスは経済事象についてのそれまで十分に解明されていなかった重要な認識を獲得することに成功したのである。以上が、スミスの仮構の事例についてのグーテンベルクの理解である¹¹⁾。

グーテンベルクはこれを、仮構という手段によって科学が極めて著しい発展を遂げた事例の1つと考える。スミスの場合には、それは、現実の複雑な経済を仮構によって単純化し、再構成して捉えることにより、その分析上の困難を削減させることを可能にしている。仮構は現実そのも

9) Gutenberg(1922), S.40.

10) Vgl. Gutenberg(1922), SS.54-55.

11) なお、グーテンベルクは仮構の例として、後述のように、さらに数学における無限小(das Unendlichkleine od. das Infinitesimale)の概念を挙げて、説明している。Vgl. Gutenberg(1922), S.56.

のではありえないのであり、その意味で非現実的な思惟構成体なのであるが¹²⁾。しかし、それが合目的に利用されるときには、有効な思考手段となりうるのである。ファイヒンガーが「したがって……良い仮構は常に『有益な』誤りである (Eine gute Fiktion ist also immer ein "fruchtbarer" Irrtum)」¹²⁾と述べている所以である。

なお、グーテンベルクが仮構についてさらに以下のように述べていることに、われわれは予め注意しておかなければならない。すなわち、「仮構は、現実と矛盾しているか、あるいは自らのうちに矛盾を含んでいる、意識的で、合目的な仮定である。その仮定は目的に対する手段として思考の中に導入されるのであり、歴史的に意味を失っているか、あるいは論理的でない。その意味は何か理論的なものにあるのではなく、単に実践的な面にあるにすぎない。」¹³⁾ここで、グーテンベルクは仮構を、現実との不一致を孕んでいるが故に歴史的または現実的意味を失っており、また理論的意味ではなく、目的に対する手段として思考計算に利用されるという点で実践的意味を有することを重視している。グーテンベルクが仮構の理論的意味と実践的意味をどのように考えているのかについては、後に考察するであろう¹⁴⁾。

(3) チューネンの『孤立国』における仮構

グーテンベルクは「かのようにの哲学」における仮構を以上のように捉えたうえで、チューネンの『孤立国』において仮構がどのような点について具体的に設定され、その研究方法として利用されているかということを通して、ファイヒンガーのいうようにそこに国民経済の仮構の理念型 (ein Idealtyp der Fiktionen der Natuinalökonomie) が見られることを明らかにしようとする。

グーテンベルクがチューネンのその著『孤立国』における仮構のための仮定の例としてあげているのは、以下の諸点である¹⁵⁾。すなわち、

- ① 孤立国では土地が同一の肥沃さおよび自然的特性を有していること、
- ② 土地の質は時間の経過によっても変化しないこと、
- ③ 穀物の収穫や一般に農業経営者の存在が依存しているところの多数の多様な変化、例えば天候、植物の病気、家畜の伝染病などの変化が生じないこと、つまり、土地の平均的収穫が一

12) Vgl. Gutenberg(1922), S.58.

13) Gutenberg(1922), S.59.

14) ファイヒンガーの「かのようにの哲学」については、わが国においても若干の哲学者の論文があるが、そのほかに、森鷗外がこれをテーマにして短編小説「かのように」を書いているのは、この哲学の1つの影響を示すものとして興味あることである。しかも、後者の小説をめぐっては、森鷗外の「かのように」の理解やその受容の如何や方法に関するいくつかの論文も書かれている。われわれはこの点についての文学上の論争に立ち入る能力を持ち合わせてはいないため、これに言及することはできない。これらについては、以下を参照のこと。

森鷗外(1995)；渡辺善雄(2000)

なお、「かのようにの哲学」についての哲学者の考察としては、次のようなものがある。

清水幾太郎(1938)；中嶋義道(1999)

15) Vgl. Gutenberg(1922), SS.73-95.

定であること、

- ④孤立国のほとんどすべての農場は同一の大きさであること、
- ⑤孤立国の地域の風土はその地域の農場経営の方法や形態に影響を及ぼさないこと、
- ⑥本来の農場経営以外の付随的事業が農場経営に影響を及ぼさないこと、
- ⑦自由式農業、輪作農業、三圃式農業といった農業方式は孤立国では純粋な形態をとって行われること、
- ⑧穀物以外の、例えば畜産物の価格が穀物価格に影響することはないこと、
- ⑨孤立国では、船舶の通行可能な河川や運河は存在しなく、消費地である都市への輸送は陸路のみで行われること、
- ⑩孤立国では、小都市が散在しているのではなく、唯一つの都市が存在するにすぎないこと、
- ⑪都市での消費は一定であること、
- ⑫労働給付の質については、一定不変の規範が存在していること、
- ⑬農業経営者は完全に合理的に行動すること、
- ⑭一定の目的の達成と共に、最終状態としての静止状態が生じること。

チューネンは、これらすべての仮定が現実的ではないことを十分に認めながら、農業と国民経済の諸問題を科学的に扱うための仮構的形成体としての孤立国を構成するものとしてそれらの仮定を設けているのであり、ゲーテンベルクは、このように形成された孤立国こそがファイヒンガーの意味での仮構を極めて典型的にあらわしていることを強調しているわけである¹⁶⁾。

ところで、既述のように、仮構が現実からの意識的乖離であり、諸問題を科学的に究明するための手段としての役割を果たすものであるとすれば、それは恣意的な構成物であってはならない。後述のように、仮構の合目的性（Zweckmäßigkeit）が特に重視されなければならないのである。勿論、仮構が合目的に構築されるように努力される場合でも、その観点から重要でない要因が入り込み、あるいは逆に本質的な要因が脱落することは、これを完全に排除しうるわけではない。そのため、そうした事態を排除するために補完的な研究によってそれを修正する必要も生じる。このこととの関連で、ゲーテンベルクは、孤立化的抽象の方法によっても、自然科学におけるとは異なり、経済科学ではその精神科学的性格（geisteswissenschaftlicher Charakter）の故に、一般妥当な法則（allgemeingültiges Gesetz）を獲得しうると期待されえないことを強調する。孤立化的抽象の方法は全く恣意的であるわけではないが、それにもとづく認識の相対性あるいは蓋然性は否定されえないのであり、チューネンもそのことを正しく理解していると考えられているのである。

いずれにせよ、ゲーテンベルクによれば、チューネン自身は「仮構」という用語を用いてはいないのであるが、彼の『孤立国』が仮構としての性格を有していることには何らの疑問も存在しないのであり、その限りで、農業と国民経済に関してチューネンが論じている諸問題の考察にと

16) Vgl. Gutenberg(1922), S.95.

ってのその科学的意義も認められるべきなのである。

(4) 「かのようにの哲学」とゲーテンベルクの経営経済理論

さて、ファイヒンガーの「かのようにの哲学」の基本的立場は、あらゆる学問の認識の対象や成果それ自体は真理なのではなく、「真理であるかのようなもの」、すなわちわれわれ人間が知覚したものを言語や判断によって加工したものとしての仮構にすぎないと考えるところにある。人間はその思惟によって直接的に真理を把握することはできないのであり、単に仮構を作り上げて、現実があたかも人間の作り上げたものと同じであるかのように考えるにすぎない。その場合、仮構については、それが現実と一致しているか否かが重要なのではなく、人間生活の問題の考察にとっての合目的的あるいは有用性の如何が重要であるとされる。生活の諸問題にとっての有用性を重視するこの見解がプラグマティズム (pragmatism) の思想と親近性を有するとされる所以はここにある¹⁷⁾。「そこに「かのようにの哲学」を道具主義 (instrumentalism) として捉える見解があらわれることも、理解できないことではない¹⁸⁾。ところで、ゲーテンベルクは一般に理論学派に属するとされるのであるが、当時の彼の経営経済学が道具主義的性格を有していたとすれば、このことは如何に理解されるべきであろうか。

この問題を考察するに際して、われわれはまずプラグマティズムの基本的特質について簡潔に概観しておかなければならない。一般にプラグマティズムと称せられている哲学の内容は必ずしも一義的に明らかであるわけではなく、むしろ論者によって多様な理解がなされているからである。プラグマティズムについてはしばしば「実用主義」という訳が付され、理論の実践的有用性を重視する立場がその内容的特徴をなすと考えられてきた。プラグマティズムを道具主義的だと見る見解が生じるのもこのことによっている。しかし、プラグマティズムについてのこのような通俗的な理解は必ずしも正しいとはいえないであろう。そこで、われわれはここでは、プラグマティズムの科学論的特徴を以下の点に求める見解を重視しよう¹⁹⁾。すなわち、

- ①有限の存在である私たちの意見すなわち信念は、常に誤りを含むものであることを自覚する可謬主義、
- ②他の人の権利を侵さない限り、すべての人の信じる権利を認める多元主義、
- ③探求によって限りなく実在に近づくことができるという「実在仮説」にもとづく探求ないし会話の継続、

がそれである。

これらの点がそれぞれ密接に関連していることは明らかであろう。人間は誤りを犯す可能性、

17) このことについては、次を参照のこと。

清水幾太郎(1938)：中島義道(1999)

18) このことについては、永田 誠(1979)、9 -27頁を参照のこと。

19) このことについては、次を参照のこと。

魚津郁夫(2001)、244頁；魚津郁夫(2002)、20頁

つまり可謬性を免れることはできないのであるから、他人の見解にも率直に耳を傾けなければならぬ。その意味で、人間は多元主義の立場に立たざるをえなく、しかも仮説-検証による探求あるいは会話の絶えざる継続によって真理に限りなく接近するほかはないからである。プラグマティズムがしばしばいわゆる論理実証主義（logical positivism）と共通性を有するとされるのはこれらの特徴にもとづいている。そして、これらの特徴が上述のような意味で通俗的に「実用主義」と称せられる場合のプラグマティズム理解と著しく異なることは明らかであろう。

なるほど、プラグマティズムには、現実の問題解決に貢献するという意味で実践的に有効な理論の確立を志向している。しかし、それが上述のような科学論的特質に支えられていることを、われわれは看過すべきではないのである。すなわち、現実についての真理の絶えざる探求の努力を通してこそ実践の問題の解決も可能になるのだというのがプラグマティズムの哲学の重視するところであり、そこにその哲学の現代的意義もあるのだと解せられるのである。

ところで、ファイヒンガーの「かのようにの哲学」において重視されていたのは仮説ではなく、仮構であった。仮構については本来的に現実と一致していることが要求されているわけではなく、したがって現実との対応の如何をテストすることによって検証されるべきものでもない。「かのようにの哲学」が理論の役割を事実の説明ではなく、生活の諸問題の解決にとっての実践的有用性ないし道具主義的意義の追求に求めているとされていた所以は、このことにある。それでは、現実との関連を有しない仮構にもとづく理論はそうした実践的有用性を発揮しうるのであるか。もしそれを持ちえないとすれば、そもそもそのような理論は如何なる科学的意味を有するのであるか。ゲーテンベルクが「かのようにの哲学」にもとづいて経営経済理論ないし理論的経営経済学を構築しようとする場合、彼はその哲学の何を受け継いだのであるか。

ゲーテンベルクが「かのようにの哲学」における仮構の典型をチューネンの『孤立国』のそれに見出すと共に、それになぞらえて Gutenberg(1929) において思惟構成体としての理論的企業を「相互依存関係にある諸量の複合体」として研究対象に設定したとき、ゲーテンベルクはそれによって企業の基本的特徴を理論的に究明することを意図していたと考えられるべきであろう。彼は現実の企業を経営経済的基本要素、すなわち合理性原理、精神物理的主体および経営経済的素材からなるものとして捉えながら、それを現実から孤立化させ、抽象的に捉えることによって、かえって現実の企業の基本的な特質を理論的に理解しうると考えたのである。それが孤立化的抽象の方法と称せられる所以である。チューネンが孤立国を仮構として想定し、それによって農業経済の基本的特徴を理論的に究明しようとしたのと、基本的には同様である。

もしこのような理解が正しいとすれば、ゲーテンベルクが Gutenberg(1929) において「かのようにの哲学」から受け継いだものはプラグマティズムの仮説-検証型の実証主義でもなければ、道具主義的な理論志向でもなく、企業についての孤立化的抽象の方法であり、それにもとづく理論的研究であったといわなければならない。そして、ゲーテンベルクが当時のシュマーレンバッハを高く評価したのも、シュマーレンバッハが原価と価格の関係を他の影響要因から孤立化させ抽象的に捉えようとしていたことに、そしてそれによってその関係を理論的により精緻に把握し

うと考えていたことによっているのであろう。このことから、われわれは、当時のゲーテンベルクが「かのような哲学」にもとづくことによって決して道具主義的傾向ではなく、かえって理論的経営経済学の構築を志向していたことを知ることができた。

それでは、本来的に現実との対応関係を要求されない仮構によって如何にして現実の企業の特徴は理論的に究明されるのであろうか。なるほど仮構は仮説-検証の方法によって実証されるようなものではないとしても、それによって理論的説明を要求している現実の一部分を理解するためには、それはその限りでの現実性を有しなければならないことについては何らの異論もありえない。さもなくば、ゲーテンベルクの経営経済学は「理論のための理論」に墮してしまおう。現実性へのこの要求は、彼がその経営経済理論における企業の定義の中で企業活動の相互依存関係を重視していたことのうちに端的にあらわれている。後述のように、彼は彼の意味での理論的企業を仮構として構築しながらも、この相互依存関係にこそ現実の企業の本質的特徴を見出していると解せられるからである。仮構は直ちに現実をあらわすわけではないが、それが特定の研究目的に規定された現実の特徴的な部分を最も的確に表現している場合にこそ、それにもとづいて現実的な理論を確立することが可能となる。ファイヒンガーが現実を仮構としてしか捉えられえないという場合、そこで意味されているのは、特定の観点から現実の特徴的な部分を孤立化させ、したがって抽象的に考察の対象とせざるをえないこと、しかもそれによって理論が非現実的になるのではなく、かえって現実を明確に説明しようということであったと解せられる。このように考えるとき、ゲーテンベルクの経営経済理論が仮構としての理論的企業にもとづきながら、かつ企業の現実に関わろうと意図していたこともまた明らかである。

このこととの関連で、仮構について、真の仮構 (echte Fiktion) と半仮構 (Halb- oder Semifiktion) が区別されていることに、われわれは注意しなければならない。真の仮構とは、それ自体において論理的に現実との合致を確認しえない、あるいは現実と矛盾しているような仮定であり、例えば、有と無との間の中間的存在ないしどちらつかずのもの (Zwitterding zwischen Etwas und Nichts) をあらわす無限小 (Unendlichklein ; Infinitesimal) の仮定がその典型である。これに対し、半仮構は単に現実と合致していない、つまり日現実的な仮定を意味する。社会科学において一般に仮構という場合、半仮構を指すと考えられるのであり、抽象化されているという意味で現実と一致しているわけではないが、決して現実と完全に無関係に恣意的に形成された仮定であるわけでもない²⁰⁾。われわれが仮構について現実の本質的部分をあらわしていることを重視する所以である。ゲーテンベルクも仮構としてのチューネンの孤立国と現実との関係について、次のように述べている。すなわち、「なるほどチューネンのこの構成体は現実中存在したのではなく、また現実に見られうるものでもない。しかし、この構成体については、それがその観念性 (Ideellitat) にもかかわらず、経験にしっかりと根ざしており、現実との緊密な関連へともたらされていることが、その特徴的なことなのである。」²¹⁾

20) Vgl. Gutenberg(1922), SS.57-59.

21) Gutenberg(1922), S.106.

そこで、次章において、われわれはゲーテンベルクのこのような見解を彼自身の論述からさらに確認しておこう。

3. 経営経済理論の対象としての企業

1926年から1927年にかけて教授資格獲得論文を書いていた当時のゲーテンベルクが自ら解答しなければならなかった問題として、彼は相互に関連する以下の5つのものを挙げている²²⁾。

- ①企業を適切な根拠にもとづいて諸量の間の相互依存関係の体系として把握し、理論的観点において記述することができるであろうか。
- ②企業が経営外的与件の変動や企業自体によって生ぜしめられる条件の変動に反応するというように、企業を反応構造（Reaktionsgefüge）の性格を有するものとして捉えることは妥当であろうか。
- ③企業の構造が与件変動の故に一定の出発状態から他の状態へと移行するという反応的体系（ein reagierendes System）として把握されるとき、この状態の変化は企業における最も有利な過程形成の可能性を実現するものと解せられうるのであろうか。すなわち、企業は与件変動によってもたらされた新しい状態への適応過程の体系として捉えられうるのであろうか。
- ④理論的努力がそのときどきの最大可能な一般性を有する言明を獲得することを課題とするのであれば、扱われている問題自体にとって重要ではないようなあらゆる偶然的な状況はそこから排除されなければならないのだろうか。
- ⑤経営経済理論にとって数学的方法は意義を有するのか。

これらの5つの問題こそは、当時のゲーテンベルクが教授資格獲得論文において取り組んでいたものにほかならない。現実の複雑な企業を「相互依存関係にある資本部分の諸量の複合体」という科学的構成体として抽象化して経営経済理論の対象にするという彼の試みが成功してきたことは、以後の半世紀にわたる経営経済学の輝かしい発展を見れば明らかである。しかし、当時においては、著しい多様性と異質性を示す現実を彼の方法によって統一的関係へともたすことについては、経営経済学者の間で支持が得られていたわけではない。そこで、ゲーテンベルクは上記の5つの問題と関連づけて、このことについてさらに考察することとなる。それによって、彼は、シュマーレンバッハとシュンペーターが彼の研究に如何に重要な影響を及ぼしたかも明らかになると考える。

ゲーテンベルクによれば、シュマーレンバッハは彼の研究の所期の段階では、経営経済的に興味のある事実を可及的正確に記述することに限定し、そこから何らかの一般的な推論や結論を導

22) Vgl. Gutenberg(1989), SS.29-30.

ただし、このうち、②と③はほぼ同様の内容をあらわしているように思われる。

出することを意識的に断念していた。しかしその後、シュマーレンバッハは彼の経験と構成的思考の能力をもって実践的意味で (in pragmatischem Sinn) 経営的情報用具を改善するという意図のもとに企業の計算制度の問題の科学的考察に関心を向けるようになった。それは彼の著書 Schmalenbach(1925) に端的にあらわれているのであるが、彼がこの書物において取り上げた問題と採用した方法はそれまでの彼自身にとっても、当時の経営経済学にとっても新しいものであった。彼はそこでは経営的費用計算の組織や技術ではなく、所与の生産能力のもとでの生産量の変化が生産費に及ぼす影響関係を論じているのであるが、前述のようにゲーテンベルクの科学的関心を惹いたのはまさに経営経済的に重要な諸要素ないし変数の間の相互依存関係を分析するというシュマーレンバッハのこの研究の問題と方法であったのである。

もとより、シュマーレンバッハのこの方法は厳密にはゲーテンベルクのいう孤立化的抽象の方法であるわけではない。生産費に及ぼす影響要因としては、生産装置の質、作業強度、作業報酬など、生産量以外にも種々のものがある。費用を固定費と比例費に区分し、他の条件をないし要因を一定と仮定して生産量と生産費の関係を導出すれば、大量生産の原理の原理的作用によって単位費用は論理的には生産費の増加と共に低下し、一定の値に限りなく接近するはずである。しかるに、一般に想定されているように平均費用がU字型を示すとすれば、すなわち一定の生産量からその増加と共に平均生産費が上昇するという事態が生じるとすれば、その原因はこれを、作業強度による特別な費用の発生や超過労働に対する特別な報酬の支払いなどに求めざるをえない。シュマーレンバッハにおける生産量と生産費の間の依存関係の研究もこれらの影響を考慮に含めて行われていたのであるから、「他の条件が一定であるならば」という想定のもとで生産量と生産費の関係を完全に孤立化させてなされていたわけではない。これが、ゲーテンベルクにおいてシュマーレンバッハの研究が厳密には孤立化的抽象の方法によるものではないとされる所以である。しかし、ゲーテンベルクはシュマーレンバッハのそのような研究のうちに、過程の形成という組織的問題に対してとは異なる方法にもとづく過程の理論的分析を見ると共に、この点で彼はシュマーレンバッハから著しい影響を受けたと考えているわけである²³⁾。

Schumpeter(1908) においては、国民経済は理論的には経済的諸要因の関数体系として捉えられうるとされ、その関係は一定の与件状況によって規定され、与件変動と共に変化すると考えられている。国民経済についてのシュンペーターによるこの把握も上記と同様の意味でゲーテンベルクの特別な関心を喚起するものであった²⁴⁾。すなわち、ゲーテンベルクはこのシュンペーターの基本的見解と前述のシュマーレンバッハの見解との間には、国民経済の変数についてであるか、経営経済の変数についてであるかの相違はあれ、国民経済や企業を変数間の相互依存関係として理論的に捉え、その関係を理論的研究の対象にしている点で、方法論的に共通性があることを重視しているわけである。ゲーテンベルクにおいて企業が理論的には相互依存関係にある諸量の複

23) Vgl. Gutenberg(1989), SS.31-33.

24) Vgl. Gutenberg(1989), S.33.

合体として把握されるに至った所以は、これら両者の方法論的立場の影響によるのである。

グーテンベルクがそうした企業理解と共に重視したのは、調達、財務、販売、生産といった企業の各領域における出発状況（与件）の変化が他の領域、つまり企業の全体構造における変化を生ぜしめ、結局は企業を再び新たな経営内の均衡の状態へと移行せしめるということであった。グーテンベルクが彼の教授資格獲得論文において経営経済理論の対象とした企業はまさに与件変動に対するそうした反応体系（Reaktionssystem）としてのそれであったのであり、このような反応過程ないし適応過程（Anpassungsprozesse）の究明こそが彼の理論の課題であったのである。

ところで、グーテンベルクは、外部関係に対して内的適応を行うものとして想定していた企業が与件変動に可及的に最適に適応すべく企業指導者による意図的な諸活動の体系であることを重視する。彼はこのような企業を「その生産装置への介入によって生産係数（Produktionskoeffizienten）を変化させ、その場合、利潤あるいは損失をもって活動し、財務的緊張にさらされているような企業」²⁵⁾として捉えていた。彼によれば、それは経営経済学がまだ関心を寄せてはいなかった「動態的企業（Dynamisches Unternehmen）」としての性格を有しているものなのである²⁶⁾。そのような企業においては、企業指導者の行為格率について次のことが妥当する。すなわち「企業指導者は各局面に含まれる変数をその時々企業にとって重要な与件状態へと適応させるという課題を有しているものであり、この問題の解決に成功する限りでのみ企業の存続は確保され、企業による有利な機会の成果的な利用のための前提が存在する」というのがそれである²⁷⁾。

ところで、理論的経営経済学の対象としての企業は完全な現実性（Wirklichkeit）、一回性（Einmaligkeit）あるいは個別性（Individualität）を示しているわけではない。理論についてのグーテンベルクの当時の理解によれば、可及的に大きな一般性を有する言明に向けられた理論的構想はあらゆる偶然的なものから解放されなければならなかった。経営経済学における理論的構想は現実性のみならず、正しさ（Richtigkeit）を志向するべきだからである。現実の企業は合理性計算と人間的な計算不可能性との産物であり、それらは企業事象に対して科学的に把握しえないほどの多様性をもたらす。グーテンベルクが精神物理的の主体と称するものはまさに、一回性や偶然性を含む現実の経済主体にはかならない。だが、この現実の企業指導者としての精神物理的の主体は理論的には、その時々との与件に対して収益極大化ないし利潤極大化の原理という格率に従って、それに適切に適応すべく企業を管理する主体として捉え直されるのである²⁸⁾。

この意味での企業指導者はもはや経験的な存在ではなく、合理性要求にもとづいて行為する理

25) Gutenberg(1929), S.112.

26) Vgl. Gutenberg(1989), SS.33-40.

ただし、ここでの「動態的」が予見変動への適応をあらわしていること、すなわち後にシュンペーターがSchumpeter(1926)において強調した生産関数（Produktionsfunktion）の変更ないし革新（Innovation）による「経済発展（wirtschaftliche Entwicklung）としての「動態性」ではないことに、われわれは注意しておかなければならない。

27) Vgl. Gutenberg(1989), S.38.

28) Vgl. Gutenberg(1989), SS.40-41.

論的存在である。そして、ゲーテンベルクは、それが孤立化的抽象の方法によって獲得されたものであることを強調する。企業事象はあたかも精神物理的主体が存在しないかのように、すなわち種々の変数があたかも直接的に合理性原理によって指導されるかのように考察されるのである。ここに前述の「かのようにの哲学」の影響が最も端的にあらわれていることは、明らかであろう。このように、ゲーテンベルクは企業指導者の合理的行為が今日なお理論的構想の構成的要素をなしていると考えているわけである。

さて、ゲーテンベルクは1926年および1927年における経営経済学への彼自身の科学的努力の第1段階において、次のような諸点が重要であったと述べている²⁹⁾。

- ①経営経済的に重要なあらゆる諸問題が同様の関係を有するように経営経済学の対象を規定しようとする彼の試みから、彼はその対象が企業の特定の部分領域にはなく、その全体にあるのだという結果に到達した。
- ②前述のように、ゲーテンベルクは彼のこの見解の科学的定着を、国民経済学ではなく、当時の経営経済学の重要な研究成果であり、2つの変数間の依存関係を究明しようとしたSchmalenbach(1925)に関連づけて試みた。ゲーテンベルクはこの方法を、企業の多数の変数間の依存関係の全体システムの研究のための一般的方法として適用しようとしたわけである。
- ③この考慮は方法的には、チューネンの方法と、シュンペーターを通してワルラスの体系を知ることによって容易にされた。
- ④ゲーテンベルクは企業を理論的見地から、物的材、労働給付、用役給付といった要素からなる企業システムの変数間の関係の体系として定式化した。依存関係のこの体系は物的および人的な存在の変化を通して、調達、販売、技術、財務といった与件の変動に反応する。この反応は新しい与件状態への適応の活動を生ぜしめるのである。

以上の点こそは、ゲーテンベルクがその著 Gutenberg(1929)において構想したものにほかならなかったのであるが、彼は当時の彼の研究がまだ不完全であり、断片的であったことを認めている。しかし、当時の彼の念頭にあったのは高度の正確性への要求をもって企業における与件変動の結果を研究するための企業モデルであったのであり、彼はそれが後の彼の経営経済学的思考を基本的に規定したものであると回顧している³⁰⁾。

さて、前述のように、ゲーテンベルクはフランクフルト大学のシュミット (Schmidt, F.) とカルフェラム (Kalveram, W.) による彼の教授資格獲得論文に対する積極的な評価によって、1928年5月にミュンスター大学で教授資格を取得した。その後も、彼はブルック (Bruck, W. T.) 教授率いる経済政策ゼミナールで助手を続けていたのであるが、1929年11月に同教授との個人的な意見の衝突の故に同ゼミナールの助手の地位を失うこととなった。当時は失業の時代であ

29) Vgl. Gutenberg(1989), SS.42-43.

30) Vgl. Gutenberg(1989), S.43.

ったが、懸命の努力の末に、ゲーテンベルクはベルリンのドイツ中央組合金庫 (Deutsche Zentralgenossenschaftskasse) の監査 - 信託会社 (Revisions- und Treuhandgesellschaft) に仕事を見つけることができ、ミュンスター大学から休暇をとって1930年3月初旬にその仕事に就いた。だが、当時の規定によれば、私講師としての休暇は2年間に限ってのみ認められていたため、ミュンスターにおける教授資格認可を失いたくなければ、彼はそこからあまり遠くないところで仕事を探さなければならなかった。そこで、彼はエッセンのドイツ経済監査株式会社 (Deutsche Wirtschaftsprüfung AG.) のドルトムント支店に移った。1932年から1933年にかけての同社での実務経験の後、ゲーテンベルクは1934年に経済監査士の試験に合格した。彼はその後、エッセンに転居し、1936年(あるいは1937年?)にはそこで独立して経済監査士の実務を開始した。なお、1932年には、彼は既に、当時の弁護士補 (Rechtsdeferendarin) であり、後に弁護士 (Rechtswältin) となったマグダレーネ・ブッセ (Magdalene Busse) と結婚していた。

ゲーテンベルクはミュンスターでの講義義務を遂行しながら、同時に1937年夏学期にはロストック大学からの講義依頼に応じた。さらに、1938年秋にはクラウスタール - ツェラーフェルト鉱山大学 (Bergakademie Clausthal-Zellerfeld) からの招聘を受け入れた。1939年3月にはエッセンでの経済監査士としての実務をやめ、4月1日には妻と3歳になっていた娘レナーテ (Renate) と共に、クラウスタールへと転居した。同年8月26日には、彼は兵役に就くべく召集された³¹⁾。

このように1928年の教授資格獲得の後に実務経験をも積みながら、当時のゲーテンベルクは学問の道を歩むべきか否かについて悩んでいた。これは、彼の見地からすれば当時の経営経済学には大きな方法論的欠陥があると考えられることによっていた。彼は、理論は本質的に数学的性格を有していると考えていた³²⁾。当時の古い世代の経営経済学者は彼のこの科学的関心に対して何らの理解をも示してはいなかったのであるが、ゲーテンベルクが自らの数学的知識を拡張させようとしたところ、ミュンスター大学はそのための多くの機会を与えてくれた。同大学の経済政策ゼミナールの助手であった時期にはその仕事のために自由になる時間は多くはなかったが、ゲーテンベルクは彼のこの研究に有効と思われる2人の学者の研究に注目した。クールノー (Cournot, A.) の Cournot (1838) とパレート (Pareto, V.) の Pareto (1927) がそれである。

前者のクールノーの研究は経済学においても長らく注目を集めることはなかったのであるが、それはその孤立化的抽象の方法と経済問題の数学的取り扱いの故に、ゲーテンベルクにとっては特に興味を惹くものであった。それが企業と市場の間の関係の理論的究明に果たした貢献は否定されえないからである。そのような理論的洞察の獲得が価格設定といった実践的な (pragmatisch) 視点よりも劣っているという見解は、ゲーテンベルクの科学理解からすれば首肯しうるものではなかった。これに対し、後者のパレートの研究に対してゲーテンベルクが特に関心を寄せたのは生産係数の変動の問題であった。彼はこの問題についてはこれを教授資格獲得

31) Vgl. Gutenberg (1989), SS.44-45.

32) Vgl. Gutenberg (1929), S.30.

論文において既に簡潔に取り上げていたのではあるが、パレートのこの研究があらわれるに至って、生産係数を彼の研究の中心に据えることとした³³⁾。

さて、万仲脩一(2002)で紹介したように、ゲーテンベルクはミュンスター時代にクロムファルト(Kromphardt, W.)とヴィレッケ(Willeke, E.)と親交を持っていた。ヴィレッケは社会学と彼の師であるプレング(Plenge, J.)の方法に強く影響されていたことから、ゲーテンベルクの教授資格獲得論文に対しては、企業を極めて合理的なものとして捉えている点、とりわけ精神物理的主体を排除している点で異論を投げかけた。ゲーテンベルクはこのヴィレッケの批判を彼の理論的立場とは相容れないとしながらも、社会集団が理論的研究の出発状況に対する代替物になりえないかどうかについて考察した。そのために、彼はプレングの学説を研究し、その講義にも出席し、個人的にも知己を得たのであるが、結局はプレングの社会学から経営経済的問題にとって重要と思われる方向性を見出すことはできなかった。

経営経済学においても、企業を社会的形成体(ein soziales Gebilde)ないし社会的システムとして研究対象にしようとする試みは行われてきた。ゲーテンベルク自身も後の1957年のケルン大学の創立記念講演の中で、企業において協働へと結びつけられている人間集団の観点から経営経済学の問題を展開する可能性の如何に言及している³⁴⁾。しかし、彼は人間と労働職能との間に科学的要求を満たすような統一体を作り出すことには極めて大きな困難があることを指摘せざるをえなかった。ゲーテンベルクによれば、彼が1920年代に既に見ていたこの困難性は、後にSchanz(1977)において展開された行動科学的経営経済学(Verhaltenswissenschaftliche Betriebswirtschaftslehre)の構想の中にあらわれている。そこでは、組織参加者や市場参加者である限りにおいて人間は経営経済学の認識対象をなすのであるが、その行動が個人心理学的方法によって研究されているためにそれら労働する人間が企業の中で行う職能との関連は無視される結果になっているからである³⁵⁾。

ゲーテンベルクにおいては、経営経済学の解決すべき問題は調達、給付生産、給付利用、財務といった経営的職能から導かれるのであって、それらの職能が計画的および組織的な監督、革新、最適化の諸問題と結合されるところに経営経済学の主要な課題が存在する。そして、ゲーテンベルクによれば、企業遂行の人的な構成部分と物的なそれとを並列的に扱うのではなく、相互に統合しようとする試みは、シャンツの行動科学的経営経済学においてではなく、Katz/Kahn(1967)やMiller/Rice(1967)といった英語圏の研究者によってむしろ成果的に行われてきた。企業を社会システムとして論じようとする構想はゲーテンベルクの見解の代替物として考慮の対象にはなるであろうが、彼は企業を人的な構成部分と物的なそれとの統合されたものであるという意味で、単なる社会システムを超えるものとして捉えているのである。

33) Vgl. Gutenberg(1989), S.46.

34) Vgl. Gutenberg(1957).

35) Vgl. Gutenberg(1989), SS.46-49.

4. 『経営経済学原理』の準備作業

1930年3月はゲーテンベルクの職業生活における大きな区切りのときであった。実践における彼の第2の局面がこの時期からはじまったからである。前述のように、ミュンスター大学から休暇を得ながら、彼はベルリンの監査-信託会社に職を見つけたのであるが、同社は当時は殆ど専ら、組合の形態をとる建設業の信用調査をその親会社であるベルリンのドイツ中央組合金庫の委託によって行っていた。当時のドイツ経済の困難な状況のもとで建設業の組合も破産寸前の状態であった。高度の技術を用いて高い責任意識のもとで行われた同社による監査から、ゲーテンベルクはその危機的な現実を目の当たりにすることとなった。これから得られた経験にもとづいて、彼は当時の経営経済学界の指導的な雑誌の1つであった『商業学と商業実践（Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis）』にいくつかの論文を発表した。

1932年にゲーテンベルクがエッセンのドイツ経済監査会社に職を見つけ、同社のドルトムント支店とエッセンの本店で仕事をし、1934年に経済監査士の試験に合格したことについては、既に述べた通りである。その経験を通して、彼はルール地方の工業および商業の中企業や大企業の状況からも、当時のドイツ経済の破滅的な実態を如実に知ることができた。1930年代中葉にはドイツ経済は立ち直りを見せたのではあるが、そのときには経済監査士は企業のあらゆる問題についての専門家としての地位を認められるようになっていた。

ミュンスターはドルトムントとエッセンから比較的近いために、ゲーテンベルクは彼の専門である経営経済学の研究を再開することができるようになった。そして、彼は経営経済学の教育の意義を改めて知ると共に、その学科の成果を彼の日常の仕事の中で実践した。しかし、ゲーテンベルクは間もなく再び科学的思考に対してさらに大きな情熱を感じるようになり、「経験は抽象化の方法を排除するものではなく、そのための前提が存在する場合にはむしろそれを促進する」³⁶⁾ことを知った。このようにして、1930年初めには決して再び入ることはないだろうと思っていた学問研究の道に、彼は戻ることになったわけである。

ゲーテンベルクは彼の研究へのこの衝動を次の書物、すなわちシュナイダー（Schneider, E.）のSchneider(1932)およびSchneider(1934)と、シュタッケルベルク（Stackelberg, H. v.）のStackelberg(1932)およびStackelberg(1934)から受けた。シュナイダーの生産理論とシュタッケルベルクの費用理論についての2つの文献は経営経済学の観点からも極めて示唆的なものではあったが、当時の経営経済学からは全く注目されてはいなかった。しかし、それらはゲーテンベルクを強く刺激したのであり、ドルトムントとエッセンにおける経済監査士の多忙な仕事をこなしながら、彼はそれについて熱心に研究した。

いずれにせよ、この時期のゲーテンベルクはクールノー、パレート、シュナイダー、シュタッ

36) Gutenberg(1989), S.54.

ケルベルクといった国民経済学者の著作を研究することを通して、そこから単に国民経済学の諸問題の考察にとってのみ適切であるわけではない、多くの思考や方法的用具を学んだのであり、同時にどのような研究テーマや方法が彼自身の科学研究にとって適切であるかを考えていたのである。

ゲーテンベルクは理論に特別な関心を持つ実務家として、「理論は経営経済的課題の解決にとって重要であると共に、経験は抽象化を介して科学になる」のだとする見解を強めた。そこで、彼は企業の諸問題を経営経済学において、その課題にとって適切な抽象化にもとづいて説明することを目指すこととなった。1935年には、彼が後に主著『経営経済学原理』において実現しようとした計画が具体的に成りはじめたのである。

その出発状況としては、次の点、すなわち、ゲーテンベルクが1920年代と1930年代初頭の経営経済学の進展を意識的に経験してきたことが挙げられなければならない。前述のように、重要な経営的変数である生産量と生産費との間の相互依存関係についてのシュマーレンバッハの研究は当時の経営経済学的研究の中でゲーテンベルクにとってとりわけ印象的なものであった。そして、彼は経営経済理論の対象の探求の試みとの関連で、パレートとクールノーの企業の理論 (the Theory of the firm) とミクロ経済理論 (mikroökonomische Theorie) についての国民経済学的研究を個別経済学的視点のもとで考察することとした。当然のことながら、国民経済学者はそれら企業の理論やミクロ経済理論を個別経済的ではなく、全体経済的均衡の問題の解決との関連で展開していたのであり、当時の国民経済学において用いられていた数量的な分析用具もまた専らそのような国民経済的問題の解決に向けられていた。勿論、その方法的用具や研究成果は歴史学派の国民経済学は何ら関心の向けられるところではなかったのであり、ましてや当時の経営経済学においては一般に受け入れられるものではなかった。しかし、1935年頃には、ゲーテンベルクの意図していたことがより明確な形をとりはじめるにつれて、彼の方法論的用具は上記のように、企業における均衡過程の数学的分析を特に意識したものになっていった。

ところで、まさにその時期に、ゲーテンベルクはチュービンゲンのコールハマー出版社 (Kohlhammer-Verlag) ——当時の同社の編集責任者は後のケルン大学教授となったヴァイサー (Weisser, W.) であった——からある全集の「経営経済学」の巻の執筆を依頼された。その全集の執筆者には、クロムファルト、プライザー (Preiser, E.), シュタツケルベルクなども含まれており、ゲーテンベルクはこれを機にプライザーとの知己を得ることになった。この全集の出版は戦争による混乱のためについに出版されることはなかったのであるが、ゲーテンベルクはその間にも彼の担当する経営経済学の部分についての執筆を続け、完成をみたところで、1948年から翌年にかけての冬に、数百ページに及ぶその原稿をプライザーに提出した。プライザーはこれを、ハイデルベルクのシュプリングァー出版社 (Springer Verlag) の依頼で編集していた「法学-国家学全集 (Enzyklopädie der Rechts- und Staatswissenschaften)」の経営経済学の中の1巻に加える気はないかとゲーテンベルクに打診した。ゲーテンベルクは原稿はかなり膨大であったため、彼はそれを2巻本として出版することでそれに応えた。彼は1947年末には、フランクフルト

大学から招聘を受け、翌年の1948年にはそこで講義を開始することとなっていた。経営経済学者としての彼の戦後における本格的な活動が始まったのである。

5. 結

1920年代から第2次大戦終結時に至るまでのゲーテンベルクの実務的経験および学問的遍歴についての、彼自身の回想はおおよそ以上の通りである。彼は、一方では、実務界での経験を積み、しかもそこから大きな刺激を受けた。他方では、彼は、ファイヒンガーの「かのように」の哲学とチューネンの『孤立国』について研究を通して経営経済学にとっての孤立化的抽象の方法の有効性を確信し、さらに、シュマーレンバッハはもとより、とりわけ多くの国民経済学者からの影響を受けてそれを精錬化し、当時としては新しい経営経済学の確立への方向へと向かいつつあった。われわれは、上述のことから、このような経緯を明瞭に知ることができた。この意味で、この時期のゲーテンベルクの研究は戦後に公刊された彼の主著 Gutenberg(1951)(1955)(1969)に至る前段階ないし、それらにあらわれた彼独自の経営経済学の確立に向けての準備段階にあったといえよう。われわれは稿を改めてその主著についての彼自身による回顧をたどることとしよう。

参考文献（アルファベット順）

- Albach, H. (Hrsg.)(1989) : *Zur Theorie der Unternehmung—Schriften und Reden von Erich Gutenberg, Aus dem Nachlaß—*, Berlin · Heidelberg · New York · London · Paris · Tokyo 1989.
- Cournot, A.(1838) : *Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses*, Paris 1838.
(中山伊知郎 [訳], 『富の理論の数学的原理に関する研究』日本評論新社, 1982年)
- Gutenberg, E.(1922) : *Thünens Isolierter Staat als Fiktion*, 1922.
- Gutenberg, E.(1929) : *Die Unternehmung als Gegenstand betriebswirtschaftlicher Theorie*, Berlin 1929
(Nachdruck Frankfurt a. M. 1967).
- Gutenberg, E.(1951) : *Grundlagen der Betriebswirtschaftslehre, Bd. I , Die production*, 1. Aufl., Berlin · Göttingen · Heidelberg 1951. (第2版邦訳書, 溝口一雄 / 高田 馨 [訳], 『経営経済学原理・第1巻 生産論』千倉書房, 1957年)
- Gutenberg, E.(1955) : *Grundlagen der Betriebswirtschaftslehre, Bd. II : Der Absatz*, 1. Aufl., Berlin · Göttingen · Heidelberg 1955. (第2版邦訳書, 溝口一雄 / 高田 馨 [訳], 『経営経済学原理・第2巻 販売論』千倉書房, 1958年)
- Gutenberg, E.(1957) : *Betriebswirtschaftslehre als Wissenschaft*, Krefeld 1957.
- Gutenberg, E.(1969) : *Grundlagen der Betriebswirtschaftslehre, Bd. III : Die Finanzen*, 1. Aufl., Berlin · Heidelberg · New York 1969. (第3版邦訳書, 溝口一雄 / 森 昭夫 / 小野二郎 [訳], 『経営経済学原理・第3巻 財務論』千倉書房, 1977年)
- Gutenberg, E.(1989) : Ruckblicke, in : Albach(Hrsg.)(1989), SS.1-109.
- 近藤康男(1974) : 『チウネン孤立国の研究』(近藤康男著作集 第1巻), 農山漁村文化協会, 1974年。
- Katz, D./Kahn, R. L.(1966) : *The Social Psychology of Organizations*, New York · London 1966.
- 万仲脩一(1984) : 『ゲーテンベルク学派の経営経済学』千倉書房, 1984年。
- 万仲脩一(2002) : 〈研究ノート〉ゲーテンベルクの回想 (1) : 経営経済学研究に向けて, 「大阪産業大学経営論集」第3巻 第2号, 2002年2月。

- Miller, E. J./Rice, A. K.(1967) : *Systems of Organization : the control of task and sentientboundaries*, London, 1967.
- 森 鷗外(1912) : かのよう, 『森鷗外全集 3, 灰燼/かのよう』ちくま書房, 1995年, 255-291頁所収。
- 永田 誠(1979) : 『経営経済学の方法』森山書店, 1979年。
- 中島義道(1999) : ファイヒンガーの虚構主義, 中島義道[著], 『時間と自由——カント解釈の冒険——』講談社, 1999年, 305-322頁所収。
- Parero, V.(1906) : *Manuale di economia politica*, 1906.
- Schanz, G.(1977) : *Grundlagen der verhaltenstheoretischen Betriebswirtschaftslehre*, Thübingen 1977.
- Schmalenbach, E.(1925) : *Grundlagen der Selbstkostenrechnung und Preispolitik*, 2.Aufl., Leipzig 1925.
- Schneider, E.(1932) : *Theorie monopolistischer Wirtschaftsformen*, 1932.
- Schneider, E.(1934) : *Theorie der Produktion*, 1934.
- Schumpeter, J. A.(1908) : *Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Leipzig 1908.
(大野忠男・木村健康・安井琢磨[訳], 『理論経済学の本質と主要内容(上・下)』, 岩波書店, 1983~1984年)
- Schumpeter, J. A.(1926) : *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig 1912, 2.Aufl., Munchen/Leipzig 1926.(第2版邦訳書, 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一[訳], 『経済発展の理論——企業者利潤・資本・信用・利子および契機の回転に関する一研究——(上・下)』岩波書店, 1977年)
- 清水幾太郎(1938) : ハンス・ファイヒンゲル, 新道正道[代表], 『廿世紀思想 第2巻 実用主義』河出書房, 1938年, 170-197頁所収。
- Stackelberg, H. v.(1932) : *Grundlagen einer reinen Kostentheorie*, Wien 1932.
- Stackelberg, H. v.(1934) : *Marktforschung und Gleichgewicht*, Wien 1934.
- Thünen, J. H. v.(1826) : *Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie*, Hamburg 1826. (近藤康男・熊代幸雄[訳], 『孤立国』日本経済評論社, 1989年)
- 魚津郁夫(2001) : 『現代アメリカ思想——プラグマティズムの展開——』放送大学教育振興会, 2001年。
- 魚津郁夫(2002) : プラグマティズム概観——真理と実在——, 『理想』No.669, 理想社, 2002年, 10-22頁所収。
- 渡辺善雄(2000) : 鷗外とファイヒンガー——「かのやうに」再考——, 日本文芸研究会[編], 『伝統と変容——日本の文芸・言語・思想』ペリかん社, 2000年, 102-121頁所収。

Rückblick von E. Gufenberg (2)

Shuichi MANCHU

E. Gutenberg, one of the German representative business economists, tried to establish an original theory of the firm in 1920's and 1930's. In this essay, based on his own recollection I intend to survey his efforts to establish the theory, its methodological characteristics, etc.

Gutenberg had a great interest in explaining economic phenomena of firm theoretically in 1920's. First of all, in his doctoral dissertation "*Thünen's Isolated Country as Fiction*" (1922), he dealt with the methodological problem to research on the economic phenomena through the Thünen's book "Isolated Country" (1826) and found in the book the Application of "*Construction of Als-Ob (As-If)*" in terms of German philosopher, H. Faihinger. Gutenberg thought, that this method of abstraction and isolation through fiction is very useful to understand and explain economic phenomena of firm. Then he wrote the book "*Firm as Object of the Theory of Business Economics*" (1929) founded on this method. Though this book showed very new direction of theory of the firm, it attracted little attention in the German academic world of business economics in those days.

In the process of framing and refining his theory, Gutenberg learned a great deal from practical experience and acquired methodological influence from E. Schmalenbach, and especially from many economists like A. A. Cournot, V. Pareto, J. A. Schumpeter, E. Schneider, H. Stackelberg, etc. Through the academic stimuli from them, Gutenberg gained confidence, that his research method of abstraction and isolation through fiction is effective to establish the new theory of the firm in his direction. In fact his theory by this method formed a main stream in German business economics in 1950's and 1960's.